SCJ 51

ベトナム、少数民族のお母さんのこと

ポジティブ・ディシプリン特別対談

高松商事の高松氏

織物が得意な越川スタッフ



Cover Story
[表紙]



今年8月、首都ハノイの賑わいとは違い、静かにそしてゆるやかに時の流れるベトナム中部の村トゥアンで撮影しました。この凛とした女性のことを、次のページからご紹介します。

表紙写真:是津 哲

About Booklet
この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

SCJ 51

2009.10

Contents

4 [SCJ Report] 活動報告:ベトナム
ベトナムでの母乳育児支援

7 [Special Talk] 特別対談
ポジティブ・ディシプリンの子育てとは?
ジョーン・E・デュラント×政井マヤ

10 [Toy Box] ベトナムのおもちゃ箱

11 [Stakeholder Interview] 特別インタビュー
高松商事株式会社
代表取締役 高松秀実氏 インタビュー

12 [Staff Episode] SCJの一員として
事業部 ベトナム駐在員 越川芳枝

14 [Topics] [Information]

15 [World's Picture] どうしても載せたかった写真

発　行: 社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
ご支援に関するお問い合わせ:03-6859-0068(平日9:30-18:00)

印刷協力: 株式会社コア(この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています)

[スタッフ]
デザイン・編集: 株式会社ピーアールハウス

SCJ Report

活動報告

ベトナム

お母さんが生き生きする、セーブ・ザ・チルドレンの母乳育児支援

写真：是津 哲



キラキラした瞳のズオンさん





駐在スタッフ
越川芳枝
Yoshie Koshikawa

ベトナムのセーブ・ザ・チルドレン（以下、SC）の事業地で、とても輝いている女性に出会いました。彼女はクアンチ省フォンホア郡のトゥアン村に住むズオンさん、21歳。少数民族ヴァンキュー族の出身です。

彼女が輝いているのは、新しい家族を授かったから。まもなく2人目を出産するそうです。「上の子は男の子なので、次は女の子だったらいいですね。私もたくさんのことを教えてあげられるでしょうし。どちらにしても今までの2倍、子育てを頑張らないといけません」

ズオンさんと出会った日、集落で母乳育児支援の定期セミナーが開かれ、彼女も参加しました。村の先輩のお母さんから、母乳による赤ちゃんの育て方や栄養知識などを教わったり、子育ての相談にのってもらうためです。

この日の話題は、母親自身の栄養改善について。「子どもの頃、自分自身が栄養不良だったので、母乳でちゃんと育てられるか心配」と、ある参加者が相談。すると先輩のお母さんが、「お米のご飯だけでなく、野菜や、肉・豆といったタンパク質も出来るだけ摂っていけば、栄養のある母乳が出るようになりますよ」と丁寧に応えていました。その2人のやりとりを聞くズオンさんの顔も、とても真剣です。

実はこの村は数年前まで、子どもを母乳で育てる習慣がありませんでした。生後1ヶ月で重湯（おもゆ）などの離乳食を与えたり、母乳は栄養がないと信じていたり、昔からの育児習慣や知識不足のために、栄養不良になる子どもが、当たり前のようにたくさん



セミナー参加者の母親と子ども



トゥアンの村道で、小さな弟たちを川遊びに連れていった帰りの女の子たちに出会った。ちなみに、村民の平均収入は約2,000円。519世帯のうち約3割の159世帯が貧困家庭



育児教材。識字率の特に低い少数民族の女性のために、絵でわかりやすく説明している



母乳育児支援セミナーの様子。ズオンさんと同じように、出産を控えた女性や赤ちゃん連れのお母さんたちが集まる

いました。そういったなかSCは、2006年からクアンチ省保健局との協働で、生後6ヶ月までの完全母乳育児を広めるプログラムを開始。トゥアン村を含めた事業地で、最初はわずか16％だった母乳育児の実施率を、2008年には60％にまで上げることが出来ました。

あるお母さんが母乳育児を実践して赤ちゃんがすくすくと育っていく。それを見た周りの女性たちがまねをして母乳育児を始め、その子どもたちも健康に育っていく。自信を持った女性たちは子育てに今まで味わえなかった喜びを感じるようになり、新米のお母さんたちに伝えていく……。こんな画期的なことが村では起きていました。

ところで、この母乳育児を広めるにあたって鍵となる人がいます。それは夫です。「子どもを母乳で育てるか決めるのは、女性本人でなく、家長である男性。自給自足で収入の少ない家庭では、産後まもない妻を畑に連れていく人も少なくありません。ですから、女性がゆとりを持って育児が出来るよう、男性にも母乳育児の良さを学んでもらい、育児への参加をお願いしています」と、省保健局の担当者は説明します。

ズオンさんの輝いている理由は、実はそこにもあるようです。「私の夫は、セミナーに参加してから育児に積極的になりました。重いものを持ってくれたり、とっても優しいんです」そう言って幸せに満ちた眼ざしを見せるズオンさんでした。


下の写真の赤ちゃんのアップ。生後3日目


保健診療所で健診に来ていた母親と子ども


村の保健診療所に勤める助産師たち。家庭訪問を行って、母子の健康状態をモニタリングする。きめ細やかなケアを行う彼女たちは、母乳育児支援に欠かせない存在

男性にも母乳育児の大切さを学んでもらっています。


ズオンさんとパートナー

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、SCJ）は、ベトナムにおいて、新たに2000人の母親とその子どもを対象とした母乳育児支援プロジェクト「〜母乳で赤ちゃんを守る〜OPPAI PROJECT（オッパイ・プロジェクト）」を今年7月より開始しました。詳細はhttp://www.oppai-project.com/まで。



特別対談

ポジティブ・ディシプリンの子育てとは？

『ポジティブ・ディシプリンのすすめ』著者

ジョーン・E・デュラント

×

フリーアナウンサー

政井マヤ

『ポジティブ・ディシプリンのすすめ』は、子どもと同じ目線で向き合い、子どもの主体性をのばすためにSCが推進する子育て本。多くの国で翻訳され、高い評価を得ている同書の日本語版が、SCJ監修により出版されました。これを記念し、著者のジョーン・E・デュラントさんが来日、一児の母である政井マヤさんとの対談が実現しました。

「叩く」「怒鳴る」ことは子どもを尊重する形の子育てとは言えない

政井（以下、M）：「ポジティブ・ディシプリン」（以下、PD）というアイデアは、どこから来たのですか？

ジョーン（以下、J）：長い間、ディシプリン（しつけ）は罰や暴力に繋がるものとイメージされていましたが、本来は「教えること、導くこと」を意味します。しつけが子どもの健やかな成長のための建設的なものであることを強調したくて、「ポジティブ」を加えました。

M：子どもとの日常的な課題がドリル形式でも示されているので、PDの考え方が自然に頭の中へ入ってきました。

J：本書の目的は、既に親の中にある答えを導き出すこと。わかりやすく、使いやすいものが作りたかったので、そう言っていただけると嬉しいです。PDが大切にしているのは、いかに子どもから信頼を得られるかということ。子どもはそれを土台に、自分の能力や価値を信じ、自ら行動するよ

うになるのです。その観点から考えても、信頼感を損なうだけでなく、子どもの自信を奪うことにもつながる「叩く」「怒鳴る」行為は、子どもを尊重する形の子育てとは言えません。

何よりの解決策は力ではなく、丁寧に誠意を持って話すこと

M：子どもに手を上げてしまう親の気持ちの根底には、きちんと子どもを教育したい、周囲の人に甘やかしていると言われたくないということはないでしょうか。

M：PDの考え方は、子どもに限ったものではなく、大人同士など、ほかの人との関係にも役立ちそうですね。

J：私は、夫との関係にも応用しています（笑）。意見が食い違った時は、すぐに自分の意見を主張するのではなく、相手が何を考えているのか、どうすれば解決出来るのかをまず考える。そうすることで、結婚生活も、社会生活もより豊かになるはずです。

完璧な親など一人もいない 子ども同様、失敗から学び共に成長していけばいい

M：子育ては「出来て当たり前」という風潮があり、育児本を読んで逆にプレッシャーを感じてしまうこともあるのですが、『ポジティブ・ディシプリンのすすめ』は、とても温かい視点で綴られていて、親としての本能に逆らわないPDの考え方に、子育ての早い段階で出会えてよかったです。

J：誰一人完璧な親はいません。親も子どもと同じように失敗から学び、成長すればいいんです。

M：PDを実践することで、自分自身も高められるという素敵なおまけがついてくるのは、嬉しいことですね。

J：子育てに「こうしなければならない」というレシピはありません。世界各国で、母親を対象としたワークショップを行ってきましたが、どの国の方も、すばらしいアイデアと、子どもに対する深い愛情をお持ちです。自信を持って、子育てに取り組んでください。

M：今後PDの考え方を子育てに生かしていきたいと思います。そして、私たち一人ひとりが温かく支え合えるような社会になっていくといいですね。本日はありがとうございました。

＊　＊　＊

SCJは同書やセミナーを通して、子どもの権利に根ざしたよりよい親子関係を築くため、日本の皆さまにPDを提案していきます。
◎お問い合わせ：SCJ事業部日本
03-6859-6660 pd@savechildren.or.jp



政井マヤ氏
フリーアナウンサー。メキシコ生まれ、神戸育ち。上智大学文学部卒業後、2000年フジテレビへ入社。07年にフリーランスとなり、キャスターなど多方面で活躍。1児の母親。

早い段階で、PDの考え方に出会えてよかった ── 政井氏

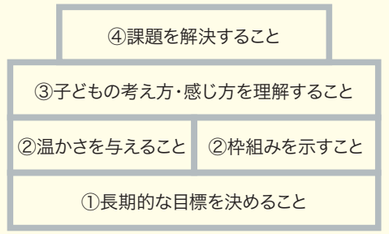
J：大切なのは子どもの発達の段階を理解し、それぞれの段階で、どんな気持ちを抱いているかを考えること。大人同士なら、相手の考えがわからないからと叩いたりはしませんよね。コミュニケーションを取り、相手を理解しようとするはずです。子どもに対しても同じこと。理解し合うことを大切にして、他者の考えを想像できる人間を育てることは、大げさかもしれませんが、世界平和にもつながっていくのですよ。逆に、手を上げて教育する子育てでは、思春期を迎えた子どもに、親が怒鳴られたり、叩かれたりすることがあっても不思議ではありません。

M：長期的な目標を心に留め、成長した子どもの姿を思い描きながら、子どもと接するという考え方も新鮮でした。

ポジティブ・ディシプリンの４原則

温かさ：「いつも守られているという実感」「いつも理解者がいるという実感」を伴う安心の根拠となるものを意味します。

枠組み：子どもたち自らの学びと成長を与えるために必要な情報、わかりやすいルール、親が示す一貫性のある手本を意味します。



子育てに「こうしなければならない」というレシピはない ── ジョーン氏



ジョーン・E・デュラント氏
児童臨床心理学者、カナダ マニトバ大学家族社会学科 准教授。大学で教鞭をとる傍ら、2003年に国連事務総長の指示により実施された世界的調査「子どもに対する暴力」の研究諮問委員会で委員に選出される。1児の母親。

J：おっしゃる通りです。本当に子どもの学びのために叱っているのか、それとも親自身のためなのか、一度、叱る前に考えてみてください。「だめ」という理由が子どもに説明出来ないまま、叱っていることはありませんか？

M：小さいうちは理由を説明せず、だめなものはだめだという言い方で注意することもあると思いますが、子どもはいつ頃から論理的な考え方が身につくのでしょうか。

J：発達には個人差があることを前提に、息子の例をお話します。生後12ヶ月目、彼がベビーチェアに座っておもちゃを投げつけていたのを見て、実験を思いつきました。まず、「だめよ」と注意しましたが、彼は構わずその作業を続けていました。再度、注意してもやめません。次に、「だめよ。なぜなら」と理由を説明すると、すぐに手を止めました。自分の考えを言葉で表現出来るようになる前に、論理的に理解する能力が備わるようです。誠意を持って教えれば、子どもは親の言葉に耳を傾けるし、日頃から丁寧に明確な説明を受けることで、「だめな理由」と共に、自分の思いを相手に伝えるコミュニケーションの方法も学ぶことが出来ます。

発達の段階を理解しその時々の気持ちに寄り添うことが大切

M：まだ先のことですが、思春期の子育てが気になります。

J：幼い頃から子どもを尊重した子育てを心掛け、話し合える親子関係を築いていれば、何も心配することはないでしょうか。



Toy Box
ベトナムのおもちゃ箱



遊ぶことは学ぶこと。
遊びは子どもたちの笑顔を生み、協調性や創造性を豊かにします。
世界中の遊びや玩具を通して、子どもたちの世界を覗いてみましょう。



協力：日本玩具博物館

Stakeholder Interview 4
特別インタビュー



高松商事株式会社
代表取締役 **高松秀実**氏 Hidemi Takamatsu

自分が受けた恩恵の一部を寄付するのは自然なこと

園芸資材・種苗の輸入や卸し業、種苗のパテント管理業を行う高松商事。収益の一部をＳＣＪに寄付いただいています。同社代表取締役の高松秀実さんに寄付に対する考え方や、昨年ベトナムを訪れ、ＳＣＪの活動を視察されたときの思いについて語っていただきました。

特別なことはしていない 自分が受けた恩恵を少しでも次の世代に役立てて欲しい

私は「所得の一部は慈善活動に寄付すべき」だと考えています。アメリカのキリスト教系大学に通っていたときに、キリスト教の献金の思想に触れたり、「自分も利用させてもらったから」と卒業生が奨学金のために寄付しているのを目にしました。こうしたいくつかの体験の積み重ねで、寄付をすることは自然なことと思うようになったんです。

支援活動といっても特別なことを行っているわけではありません。自分が受けた恩恵の一部を、ほんの少しでも次の世代や社会的弱者の方々に役立ててほしい――。そんな思いから、弊社では２００６年より、花の売り上げの一部をＳＣＪに寄付しています。

利益が出たら寄付をするという形ではなく、寄付そのものを義務化する形にしました。最初は戸惑う社員もいましたが、今では全員がその考え方に賛同してくれています。

相手のことを考え 相手のために行動することで よい循環が生まれる

仕事で大切なのは、お客さまに喜んでいただけることは何か、お客さまの立場で考えること。社員にはお客さまだけではなく、社会に対しても、家族に対しても、そういう姿勢であってほしいと思っています。

そういう信念があれば、結果的に自分にもよいことが訪れ、ポジティブな循環が生まれるのではないでしょうか。

昨年ベトナムを訪れた際に、現地でのＳＣＪの活動を視察する機会を得ました。スタッフの方々が子どもやその親に教育の機会を与えることに心の底から喜びを感じている姿を拝見出来たことは、私にとって大きな出来事でした。大いに感化され、これからも継続して支援していきたいという強い気持ちが沸き起こっています。



SCJのロゴマークが付いた花のパテント管理用ラベル。これらの収益の一部が、世界の子どもたちの支援活動に使われています。





セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
事業部 ベトナム駐在員

越川芳枝
Yoshie Koshikawa

職業訓練を終えた女性たちの希望に溢れ、輝く瞳が私に感動を与えてくれた

「人のために生きてこそ生まれてきた意味がある」と語る越川スタッフ。30年以上、人道支援活動に携わってきた彼女が、この仕事を始めることになったきっかけ、現在の活動について語ります。

アフリカで教わった織物の技術を生かし職業訓練校を設立

アメリカの大学を卒業後、アフリカのレソトを訪れ、山の中で羊毛の壁掛けを編んでいる女性たちに出会いました。彼女たちはその収益を生活費にしていました。彼女たちが織る壁掛けを見た瞬間、あまりの美しさに感動。羊毛の織り方を教えてほしいと頼むと、快く受け入れてくれました。それからというもの、アメリカに戻ってからも、夢中で織物を続けました。

その後、スワジランドに行く機会を得て、習得した織物を村の人々に教えていたところ、周囲の人に「職業訓練校を作ってはどうか」と勧められました。当時、主婦だった私には、人道支援のノウハウがまったくありませんでしたが、現地の方たちの協力で設立に踏み切る決心を固めました。



越川スタッフが織ったタペストリー

学校に通えなかった女性も経済的に自立して生き生きした表情へ

スワジランドは、村に住む人のほとんどが老人と女性、そして子どもです。男性たちは家族を支えるために南アフリカへ炭鉱夫として出稼ぎに行っており、中にはそのまま帰ってこない人もいます。そのため、学校にも行けず、裸足で走りまわっている子どもがたくさんいます。だからこそ、女性の能力を強化し、女性だけで生活していける手段が必要でした。

織物は出来ても、寸法を測ることが出来ない女性も少なくありませんでした。というのは、学校に通うことが出来なかったため、読み書き計算が出来ないのです。私は自分の子どもの教科書を使って算数を教えたりしました。

外で働いたことのなかった彼女たちが、2週間の職業訓練を終えた時、希望と自信に満ち溢れた表情をしていたのを目にしたときは、言い尽くせないほどの充実感を感じました。女性たちがだんだんと経済的に自立し、自信をつけていく姿を見たこの時の経験が、現在私が人道支援を行う上でのベースになっています。

支援活動で得た力がエネルギーとなり次の支援につながる

現在はベトナムの首都・ハノイに在住し、プログラムディレクターとして、生計支援事業、緊急支援事業、市民組織の発展のための活動を行っています。

ベトナムの経済成長は目覚ましく、1990年に58%だった貧困率は、2008年に16%まで減少しました。しかし、経済政策はまだ農村部にまで行きわたっておらず、新生児の死亡率は今も高く、栄養状態も芳しくありません。

そこでSCJでは、栄養向上活動の一環として、母乳育児の普及活動を展開しています。母親たちに村の病院に集まってもらい、保健師と一緒に、母乳がもたらすメリットを教えています。母親同士が体験をシェアし、意見を交換できる場所にもなっています。

嬉しい体験やつらく悲しい体験を繰り返しながら、全力で30年間活動を続けてきました。支援活動で得た力は、まさしく現地の〝人〟から得た力。そしてそれが自分自身の生きていく明日へのエネルギーとなって返ってきます。これからもさまざまな形で支援に携われればと思っています。



©ZETS
現地スタッフと事業内容の打ち合わせ



©ZETS
明るい笑顔を絶やさない越川スタッフ

Information

フォリフォリ オリジナルブレスレットを発売 子どもたちの夢の実現を応援

ギリシャ発のジュエリーブランド、フォリフォリ様が、SCの支援する子どもたちのためにオリジナルブレスレットを世界のフォリフォリショップにて発売。日本では10月上旬より販売を開始し（税込価格：各15,750円）、ブレスレットの売上の20%をSCに寄付してくださいます。



お問い合わせ：
フォリフォリジャパン
03-3478-0681

オレンジと
ブラックの2色

ブルガリ、スペシャル・チャリティー コレクションを特別展示

ブルガリ ジャパン株式会社様は、ブランド創設125周年を迎えた今年、「Rewrite the Future ～いっしょに描こう！子どもの未来～」に対して、1,000万ユーロの寄附を発表してくださっています。その総括となるのが、12月8日にNYで開催されるチャリティーオークション。全収益が寄附となるハイジュエリーや限定時計からなる計18点の“スペシャル・チャリティーコレクション”は、10月東京で開催されるSCのチャリティーディナーにて特別展示される予定です。

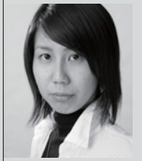


オークションハウス・クリスティーズのカタログ

Topics／最近の出来事　～お伝えしたいことが、まだまだあります～

林田麻理子スタッフ 5月よりヨルダン事務所に赴任

「日本の4分の1ほどの面積に、人口は590万人弱、ヨルダンは決して大きな国ではありません。そのヨルダンには、50万人のイラク人がいるといわれます。さまざまな背景から祖国を離れざるを得なかった家族。親への支援を通じ、どんな環境にあっても、子どもたちの教育の機会、健康な発達を促すプロセスが確保されるよう、スタッフ一同邁進いたします」

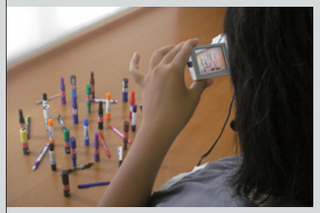


林田麻理子スタッフ

Child to Public キャンペーン 入賞作品をホームページで公開中

「私にできること」をテーマに、子どもたちの映像メッセージを募集したChild to Publicキャンペーン。全国9地域15ヶ所で実施したワークショップで制作された48本の映像メッセージの中から、セーブ・ザ・チルドレン賞、メディア・リテラシー賞各2作品を決定。コミュニケーション、いじめ、差別などに対する子どもたちの「できること」、ぜひご覧ください。

公開ホームページ：http://www.savechildren.or.jp/sc_activity/japan/video-msg-result.html



映像に込められた子どもたちのメッセージ

SCの挑戦、「Rewrite the Future ～いっしょに描こう！子どもの未来～」開始から3年が経過

2006年に5年計画で始まった紛争下の子どものための教育支援キャンペーンは、9月12日でちょうど開始から3年が経過しました。この3年間、多大なご寄付に支えられ、1,000万人以上がより質の高い教育を受けられるようになり、100万人が新しく学校に通えるようになりました。キャンペーンは一定の成果を上げていますが、困難な状況にある子どもたちはまだたくさんいます。SCでは引き続き、支援を届けていきます。

山本俊輔スタッフより スリランカからの現地報告

「北部では、10万人の子どもを含む28万人が避難民キャンプ生活を送っています。その子どもたちの約3割が重度または中度の栄養失調となっていることから、SCはキャンプおよび周辺地域の病院にいる0～10歳の子ども、妊娠中や授乳中の女性など52,000人に対して栄養補助食の緊急配布をJPFの支援の一環で開始しました。避難生活の長期化が懸念される中、更なる支援が必要とされています」



キャンプ地にて。支援を受けた親子

World's Picture

どうしても載せたかった写真

日本の子どもたち

西口祐子（SCJスタッフ）





（上）ゲームをして笑顔になる子どもたち
（下）家の機能について熱心に考えている様子

この2枚の写真は、名古屋市内の児童館で、子どもたちが大学生ボランティアと一緒に、国際協力活動の中でも家と学校の役割について学んでいる場面です。上の写真は、子どもたちがプログラムのはじめに緊張をほぐすゲームをしている様子。下の写真は、もし家がなかったらどうなるか、みんなで考えているところです。

これはSCJオリジナルのポスター式教材「Hi5!」を活用したプログラムで、2009年も1,000人以上の日本の子どもたちと実施してきました。はじめは戸惑い気味な子どもたちも、プログラムを通して「争いをするのはよくない」、「世界中の66億人が幸せになれるといい」など、シンプルで力強い意見を持つようになります。しかし今の時代、大人の世界ではそんなシンプルなことすらとても複雑になってしまいます。大人一人ひとりが「子どもの声を聴き、そこから学ぶ世界」を作ろうという意識があれば、紛争も貧困もなくなるというのに。

SCJの一員として、一人の大人としてそんな社会を早く実現したい。子どもたちとの関わりが、そう私に教えてくれます。

Editor's Note

編集後記

ベトナムの少数民族の女性の話を書いていた時、ふと亡くなった祖母のことを思い出しました。祖母は若い頃、田舎で祖父と小さな畑を耕していたので、少数民族の女性と祖母が重なったのかもしれません。「日本でも一昔前は、あぜ道に赤ちゃんを寝かせたかごを置いて農作業をして、赤ちゃんが泣いたら手をとめ授乳していたんだよ」最近、あるご年配の方がそう教えてくれました。祖母もそうやって母を育てていたのでしょうか？ 今度、祖父に聞いてみようと思っています。

岡田 茜（SCJスタッフ）

SCJ | 51 | 2009.10

Save the Children
JAPAN

発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

www.savechildren.or.jp